

があり、それを無意識に使う事によって、似かよった文を作り、自分だけが理解している英文を書くという結果になっているといえる。これ等の結果を生かして、学生にどういう指導をするかを決めていかなければならない。

参考文献

1. Michael McCarthy "*Discourse Analysis for Language Teachers*" CUP (Cambridge University Press) 1991年
2. Ecola 16 英語の指導法と関連科学、ニチブン1992年
3. 沖原勝昭 英語のライティング、大修館1985年
4. S・C. レヴィンソン・安井稔 英語語用論、研究社1990年

(副) very, always, often, fast, lately
32 15 11 9 6

(動) be動詞, live, keep, sleep, watch
78 23 19 16 15

(接) and, so, because, since, after
35 27 21 15 13

5 Title : Rainy season

(名) rain, season, day, weather, home
88 70 67 51 34

(形) hot, wet, warm, rainy, dry
55 47 30 28 21

(副) very, always, much, heavily, often
45 37 32 27 15

(動) be動詞, rain, make, stay, dry
85 71 32 27 26

(接) and, but, so, because, after
53 40 27 20 12

以上のものをまとめて各上位5つ示してみる。

(名) school, Japan, home, holiday, rain
65 75 55 27 88

各タイトルに一番近い語が最上位に来て、当然discourseを左右する重要性を持っている。

(形) pretty, beautiful, happy, happy, hot
11 43 33 13 55

肯定的な形容詞が好んで用いられる傾向があり、あまりdiscourse決定には使用していない。

(副) very, very, very, very, very
38 25 28 32 45

5つのタイトル全部でveryが最頻度である。日本人に副詞が馴んでいないといえる。

(動) be動詞, be動詞, be動詞, be動詞, be動詞
53 60 63 32 85

動詞はbe動詞が抜きんでている。これはna-

tive speakerでも同じであろうが、日本人の場合は特にbe動詞の多用が顕著である。

(接) because, because, because, and, and
42 46 38 35 53

節統詞に関しても日本人の傾向は片寄っている。思考方法と結びついてdiscourseに影響している。

(結 論)

上記の記述をもとに仮設の検証を試みる。

(仮設) 学生に共通するdiscourseの誤用と語い使用上の特徴が存在することについて
第IV章で分析したように学生の英作文には全部で13ヶ条の特徴が見られた。それをもとに、語い面も含めdiscourse上の決定について述べた結果が次のようになる。

① 学生の英文に多くの共通語いがあり、その事が共通のdiscourseを発現する土壌となっている。特に接続詞の共通化は影響が大きい。Winterの語いとは別な特徴を持つ日本人学生の用いる語いがdiscourseのゆがみを現出していると言える。

② 学生が英文を書く場合40%が提出する教師を読み手と意識しているが、自分以外の人とか、意識しない者が50%を越えていた。この事から、読む人が誰であっても、「同じ書き方」をするという事である。つまり、自己のdiscourseがあつて、それを使用して書くので、無意識にdiscourseを決定するという事が当然の帰結になってくる。

以上の事から、学生には共通のdiscourse

分が意識的に対応しないという事である。

以上の①②の2つは逆説的に対応を考えれば指導法の糸口が見い出されるという事になる。

ここでdiscourseの語い上の問題を学生の作文からアプローチするに際して、Winter (1977・78) のdiscourseを決める語い表を短大1年生の自由英作文に適用し追試してみた。Winterの掲げている55語のうち、国際教養科1年85名に英作文(STEP準1級面接用問題を使用し、4枚の絵から20個の文でessayを作らせる)で1度でも使用されたのは次の11語である。(55語中11語で20%)

case、change、equal、explantation、kind、point、problem、same、thing、time、way

この結果を見る限り、Winterがdiscourse決定要因として挙げている語いは日本人の初・中級学習者には5分の1ほどしか使われない事が分る。

それでは、日本人学生を書く英文の中ではどのようなdiscourseを決定するものとして使用されているのだろうか。上記の85名には英作文を定期的に課しているが、そのタイトル別に使用頻度の多い、名詞・動詞・形容詞・副詞・接続詞の5つについて調査した。この5つは内容語として当然discourse決定の役割を担っているという考えのもとに取り上げられた。

1 Title : Our school

(名)	school、building、student、college、club				
	65	31	30	15	11
(形)	pretty、beautiful、happy、big、long				
	11	10	10	9	9
(副)	very、often、so、always、not				
	38	20	19	19	18

(動)	be動詞、have、do、play、get				
	53	40	37	35	30
(接)	because、and、but、so、when				
	42	39	37	33	21

2 Title : Japanese Spring

(名)	Japan、spring、flower、grass、April				
	75	60	54	32	21
(形)	beautiful、happy、green、pretty、warm				
	43	27	25	20	20
(副)	very、always、slowly、often、usually				
	25	18	12	10	9
(動)	be動詞、have、do、play、walk				
	60	37	33	25	22
(接)	because、and、but、so、after				
	46	37	35	30	20

3 Title : My Family

(名)	home、house、family、father、mother				
	55	48	32	30	28
(形)	happy、glad、small、pretty、hard				
	33	27	15	14	14
(副)	very、always、often、so、well				
	28	24	20	19	17
(動)	be動詞、have、keep、give、eat				
	63	51	40	21	17
(接)	because、and、but、so、before				
	38	30	27	15	10

4 Title : My Golden Week

(名)	holiday、week、home、TV、department				
	27	21	16	15	11
(形)	happy、short、dull、sleepy、every				
	13	9	6	4	3

第Ⅱ章より、学生の作文のdiscourseの特徴として次のようなものが挙げられる。

- (1) inner discourse——特に勝手な discourseを持つことがある
- (2) 借りもののdiscourse——自分のものになり切れてない未熟さを残している
- (3) 想像上のdiscourseを持つことがある
- (4) 一息の接続詞を使う傾向がある

第Ⅲ章よりの特徴は次のようになる。

- (1) 接続詞は語いにも文法にも影響している
- (2) 語りかける形式で書くと読者を意識した文がかかる
- (3) 内蔵のdiscourseと語い力の問題
- (4) 同じ語の多用

第Ⅳ章からは次の5項目である。

- (1) 勝手な省略
- (2) 結果的正答
- (3) 規則の二重化
- (4) 無意識の挿入
- (5) 固定観念による文法の一様化

以上の様な多くの特徴と思われる事項の中から仮説Ⅰで設定した様に学生の共有するdiscourse上の特徴をまとめてみると次の2点になる。

- ① 自己個有のdiscourseを所有している
- ② 無意識にdiscourseを決定している

①について——勝手な判断、自分だけ分る省略など、初級学習者は作文においても読者を強く意識しないで書いていく場合が多い。そこで学生が英文を書く場合に、誰に読ませる事を意識して書いているかを調査したのが次の結果である。

(高専2年生4クラス201名)

- (i) 担当教師 77名 (38.3%)

(ii) 自分以外の人 69 (34.2%)

(iii) 友人 18 (9.0%)

(iv) 自分に向って語りかける 3 (1.5%)

(v) 特に意識しない 34 (17.0%)

これ等の結果と上記の1～3章までの分析項目に該当する人数とを比較してみる。

(1-1) 32/82 (1-2) 15/82

(1-3) 16/82 (1-4) 19/82

(2-1) 63/82 (2-2) 15/82

(2-3) 41/82 (2-4) 70/82

(3-1) 23/82 (3-2) 12/82

(3-3) 10/82. (3-4) 11/82

(3-5) 33/82

この中から誰に読まれる事を意識して書いたかの5項目に該当するものをそれぞれ表にすると次のようになる。

項目	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	(v)
1-1	11	8	5	1	6
1-2	4	3	1	0	2
1-3	5	5	1	0	3
1-4	4	3	1	0	2
2-1	5	6	1	0	2
2-2	7	6	1	0	3
2-3	6	5	0	0	2
2-4	12	9	4	2	4
3-1	5	6	0	0	1
3-2	6	5	3	0	3
3-3	4	3	0	0	2
3-4	4	4	0	0	1
3-5	3	4	1	0	3
計	77	69	18	3	34

②について——無意識にdiscourseを決定するという事は、discourseの決定に対して自

- (4) Because there was not rain in summer.
- (5) This summer holiday was very hot.
- (6) I did my homework in summer holiday.
- (7) I went to the pool.
- (8) I went to the camp.
- (9) Summer holidays being over, we came back to school.
- (10) Seen from a adistance, the mountain looks like a star.
- (11) I enjoyed summer holiday.

(分析) この文は 9 月になって夏休みを回顧しながら書いているので基本的には過去形であり、この学生は基本通りに全部を過去形で統一している。未来形の時と同じく、徹底して固定観念を保持し続ける。(10)の文だけlooks likeと現在形を用いているのは、「分詞構文を使う」という指示に無理に合わせるのはこの文を挿入しただけであるのであまり深い意味はないと考えてよい。

未来形にしても過去形にしても、ある事実を述べる時は「～形」という強い観念を持たせると考えの幅が広がらず思考が萎縮して発展しなくなるので指導する際に気をつけさせたい。

(5-1) My summer plan

- (1) My summer vacation isn't good.
- (2) Becsuse I will not be going to go.
- (3) I don't like summer.
- (4) Because summer is hot.
- (5) So I don't like hot.
- (6) I want to watch high school baseball.
- (7) But I don't money.
- (9) So I will watch baseball on TV.

- (10) I am going to sleep in summer.

(5-2) My summer holidays

- (1) I enjoyed this holidays.
- (2) I wanted take the sea by my friends.
- (3) I went to jumb プール.
- (4) I played baseball.
- (5) And I played soccer.
- (6) I went to Karuizawa.
- (7) Karuizawa was very cool.
- (8) I enjoy this summer vacation.

(分析) この学生は計画の段階と回顧の文では使うdiscourseがかなり違ってくる。(5-1)では事実を述べ、その理由をbecauseで書き、soで締めくくるパターンをとる。未来形は(2)と(9)の3個所にwill、(10)でbe going toが使われ、残りは全て現在形で書かれている。自分の心の中を表現する時は現在形を用いているようである。ところが、(5-2)の回顧文になると全て過去形でまとめている。最後の(8)だけenjoyとなっているが、これは意識して現在形を用いたのではなく、誤ってedを落したとみる方が内容的につながりをもつ。この学生は計画の時には自分の気持ちを多くとり入れるために現在形を多用したが、終ってからは事実をそのまま、過去形でつづるという自分なりの規則性を保持していると言える。

V 分析調査

第Ⅱ～Ⅳまでで、各学生の英作文に個々に分析を試みた。本章では、それらをまとめて何らかの法則性があるのかを検証したい。

べているつもりなのである。

(3-2)の方はT.Sというイニシャルで友人を規定し、現在完了を使って文を書き出している。firstをfarthestと「規則の二重化」(happiestでよいことをmost happiestと言い間違えたりすることに類似している)をしてはいるが、彼がこの学校で初めての友人だったと言おうとした事は分る。ところが、次の3つの文はどういう結びつきがあるのか読者には分りにくい。IとHeが同じクラブに入っていること、彼はめがね(glassesとgrassesまちがい)をかけていることと、彼の家が近いことと3つの事は、単に彼の事を思いつくままに述べただけである。3つの説明文を経て自分達が同じクラブに入っているという3番目の文に立ち帰りクラブの事を再度述べて文をしめくくっている。こういう現象は初級者に多く、「無意識の挿入文」とでも呼ぶと分りやすい。

(3-1)が非文法文であっても内容で統一的であるのに対して、(3-2)は文法的であるが、内容的飛躍を内蔵している。文法のdiscourseと内容上のdiscourseは別個の存在である例である。

次に「夏休みの計画」を3つとり上げる。

(4-1) My summer vacation plan

- (1) My summer vacation plan is sleep days.
- (2) I will go to sea and I swim sea.
- (3) I will go to mountain with friends.
- (4) I will travel in Okinawa.
- (5) I will run for summer vacation.
- (6) I will study few minutes all days.

(7) I will go to grandfather's house because he wants to meet me.

(8) I will make a tako.

(9) I will write a report.

(10) I will read many books.

(分析) この作文は夏休み前に書かれたので、未来形を使うという点で異存はないが、10個のうちの9文までI willで始めている。この学生の性格から、決してふざけているのではない。低学力の学生の場合、こういう文を書く場合が多い。これは「今からの事は未来形で書く」という固定概念があり、未来形=will or shallの助動詞しか思いつかないので、同じ文型を並べて書くことになる。同じ文型が並んでいるように見えるが、よく読むと作者の文法のdiscourseが存在している事が発見できる。(1)の文は(for) sleep (ing) daysと現在形で書かれている。その他(2)の後半に、I swim、(7)の後半でhe wants to meet~と全体で3個所の現在形があり、断定したり付加したりする時に用いている事が分る。go, travel, run, study, make, write, readと自分の行動の起因はwillを用いて、それに付随する内容に立入ると現在形で表現するという自分なりの規則を内蔵している。おそらく本人は気づいていない事である。同じ作者が夏休み後に書いた次の文と比較してみるとこの事がよく分る。

(4-2) My summer holidays

- (1) My summer holiday was good time.
- (2) I went to the sea with friends.
- (3) It was very surprising news for me.

friends is really what makes the New Year a special time.

- (5) On the New Year's Day we drink o-toso and eat zoni and osechi dishes.
- (6) Some people go out to worship the first sunrise.
- (7) We have first dream of the New Year at night.
- (8) We get a New Year's lottery post card
- (9) We say "Akemashite Omedetou".
- (10) O-toshidama originally a gift given at New Year.

(分析) この学生は英検2級にもう少しで合格するという力を持っており、自由英作文でも辞書を使って、自分の言いたい事を表現する方法を常に模索している。この英文も高専2年生(高校2年同レベル)の書くものとしては良くできていると言える。特に、関係代名詞that、what、相関接続(比較)詞less、than等をできるだけ用いて複文を作ろうとする努力がみられる。内容的には②の文が、日本ではおとし玉を小さな封筒に入れて渡すという習慣を知らない人が読んだ場合は意味がよく分らない。この文ではtheyもおとし玉をもらう立場の多くの場合子ども達を予想して書いているので複数としていると思われる。このように、書き手が「当然の事」という前提で書き続ける事が、かなりしっかりした文法力を持つ上級の学生に見られる事がある。

3 My Friend

次の2つは同じタイトルで書かれたものであるが、文法的なdiscourseから興味深い対称を

なしている。

(3-1) His name is Hakube. He is get on a train. The train is Kururi line. But He uses bus on back home. "Why are you uses bus" "I don't know". I understand to do it. His joke is good. He is good friend.

(3-2) T.S has been friend since about a year ago. He is the farsttest friend. I and He belong to same club. He is an grasses all time. His home near the school. When after school he often say "Go to Club.!!" I answer "OK" He like the club. He is best friend to me.

(分析) (5-1)は友人の実名を出す事から始めており、Hakubeの説明をして、彼と自分との会話という形で文をまとめている。3つ目までの文が全てisをとる形をしているので、2文目もgetsとすべきところをis getと誤っている。会話の文でもdo you useをare you usesと「be動詞の多用」僻が顔をのぞかしている。文法的にも問題だが、会話の「どうしてバスを使うの」という質問に、彼が「分んない」と答えた事がjokeとなっているというのも読者には理解できない一人よがりである。これは作者としては、3文目のBut He uses bus (bus) on back homeと内容的に照応しているのである。つまり久留線は彼が家路に着く頃には本数が少なく不便なのでバスにしているという彼等仲間での暗黙の了解の中でjokeとして成り立つのである。その事をI understand to do it. (実際はI understand what he is trying to say. と言うべき)で述

speakersのように、いろいろな語を知らない
ので、同じ語を使用するという結果になると
言える。

IV 英作文における文法上の discourse

discourse analysisの文法面でのアプローチは
学生の作る文に限定するかぎり、あまり深い面
は無理である。比較的表面上に現われる「時制」
とか「一致」などに焦点をしばって分析したい。

1 Mt. Fuji

- (1) Mt. Fuji is the highest Mt. in Japan.
- (2) The top of it's covered with snow.
- (3) A few people are killed myself this place.
- (4) Mt. Fuji is 3776 meters high.
- (5) It is beautiful.
- (6) The top of it's cold.
- (7) Mt. Niitaka is higher than Mt. Fuji.
- (8) It is Mt. of fire.
- (9) Many people visits Mt. Fuji.
- (10) If weather is fine, we can watch Mt. Fuji
from here.

(分析) この学生はコツコツと努力するタイ
プで、学習した事は正確に身につかないが、
応用しようと試みる事にすぐれている。こ
の文でも至る所に不正確だが努力のあとが
みられる。(1)の文はMt. という実際は不可
能な省略を使った以外は最上級やtheの使
い方も文法的に正しい。ところが(2)の文で
は「勝手な省略」が出現する。本当は作者
はThe top of the mountain is covered with
snow. と書きたかったが、「その山の頂上」

という表現に強く影響を受け、its topと言
おうとしたが、既にtopを言ってしまった
ので、一瞬とまどい思考を止めてしまった。
その間に自分が書いたitsに対して思考の
エアポケットに入ってしまうits → isとい
う図式の中に自己を埋没する結果になった
と思われる。受動態の文法的認識があった
のでis coveredに「早くしたい」という心
理的焦燥もあったようである。同じ事が(6)
に出現しているが、ここでは' (apostrophy)
を入れる事により所有格のitsでなくisの省
略になり、結果的に正しい文になっている。
こういう現象を「結果的正答」と呼ぶと呼
ぶことにしている。(7)のMt. Niitakaがどう
して比較の対象として使われたかは本文の
文脈からは分らないが、作者は「英語で書
くので外国の人も分る山で自分が知ってい
るものを出した」と述べていた。(9)の動詞
visitsの三単現のSの発生は、全体への「誤
りの照応」による。前の文の(4)~(8)がMt.
Fuji = itと単数扱いなので、ここでも単数
の主語と錯覚を起こし照応してしまうとい
う事は、初級学習者にはよく起こる事であ
る。

2 Ganzitsu

- (1) Ganzitsu is the first day in a year.
- (2) Opening an envelope for New Year's gift
is the main thing that they look forward
to.
- (3) As people get older, getting an envelope
for New Year's gift became less impor-
tant than giving them.
- (4) People realize that meeting family and

(5-3) My friends hobbies is taking pictures, too. So, I talked him "Do you go to sometimes. We have a good time, every time. We are good friends.

(分析) この3つの英文は会話部分を一つの語いとして据えた場合、非常に興味あるdiscourseを含んでいる。(5-1)の対話はHow are you? → Fine thank you. And you? → I'm fine, thank you. という中学校1年生で最初に教わる表現を基礎に文章を構成している。自分の知っている会話表現を、passageの中に散りばめているので会話の流れとしては前方照応をとっている。最後にBye byeを置く事によって会話の終了と同時に文章を締めくくって良いdiscourseを形成していると言える。対称的に(5-2)では、会話の部分の"I don't like school"が唐突の感じである。会話文を1つ入れる事を強制されたので、何とかして登場人物に何かをしゃべらせたという感じがする。会話文の前のI can't understand what she like marason. (おそらく、「彼女がマラソンが好きかどうか分からない」と言いたかったのが、「~かどうか」のwhetherとかifが思い出せなかったのである)とも、後のShe has more friends in other class.にも合っていない。マラソンがあることは、学校が嫌いな事の理由にはなるが、他のクラスの方が友人が多くいる事は自分のクラスが嫌いという理由にはなり得ても学校が嫌いという理由にはなり得ない。次のof courseも、一般的に用いられる使い方ではなく、自分の気持の放出としてのdiscourseの決定語句になっている。

「彼女の友人は他のクラスに多い」という事に対して、「自分は同じクラスの中にいる数少ないが彼女の友人だ」という事を表わしたかったのである。これも前述の「自分勝手のdiscourse」にあたる。

(5-3)の2つの対話の部分は文法的には対応していない。"Do you go to somewhere to take pictures?" "O. K. What are you go?" は日本語的発想で、「写真を撮りにどこかへ行く?」「よしきた。どこへ行く?」という、友人同士では日常的にありふれた流れを持つ会話である。Do~からの疑問文を「誘い」の文としてOKで受けたわけである。この文の作者は、語い上のdiscourseでも興味深い使い方をしている。一行目のtooもこの語だけで"I like taking pictures"という意味を含めているし、sometimes→every timeの照応も、~good timeとgood friendsの照応も無意識であるが照応を内蔵している。筆者はこれを「内蔵のdiscourse」と呼んでいる。

以上5つの例より、語いのdiscourseについて次のようにまとめられる。

- 1 学生は無意識の中に自分なりの語い上の照応を保有している。それが間違っただものである場合も多いが、discourseを意識させる訓練を課していけば内蔵されたdiscourse力が練磨され、英文として、より立派なものに成りうる可能性を多く持っている。
- 2 同じ語の多用については、代名詞化する事に慣れていないという日本語の母語干渉があるので問題は深い。それに加えて、語い数が少ないので「ある事」を言うのに、native

- (4) Sumotori put on only kimono.
- (5) Because Sumotori is decided strict rules by Sumokyokai.
- (6) So, Sumo is strict.
- (7) Sumotori is teached by Oyakata.
- (8) Oyakata used to have a Sumo bout.
- (9) But, strong Sumotori became Oyakata, but light Sumotori don't.
- (10) I would like to conclude Sumo is a national sport. So, we should watch Sumo.

(分析) 2と同じタイトルであるが、この文は、SumotoriやOyakataという人間にpointを置いて書かれているのでdiscourseも異っている。語い選択上では、特に接続詞に関して特徴的である。becauseとsoを多用している事が一見して分る。しかし、この2つの接続詞の本当の意味を理解しているのではない。日本語で「～というのは」、「だから」という接続語句を特に口語では「言葉のつながり」として使う事が多い。この言語習慣をそのまま英文に移行してしまう学生が多い。2の文が1の理由にはなっていないのでbecauseという語で文をつなげない。こういう接続語句の選択は「語い」「文法」両方に問題を含んでいる。

4 My Golden Week Holiday

This year's Golden Week holiday was so exhausting for me because of so many activities. First of all, I've done part-time job at night for whole week. During daytime I played basketball together with some foreign students. And as a treasurer in the church (church of Christ)

I've done some office works during Sunday and Tuesday. And most exhausting one is the hiking were—in. I walked for twenty kilometers.

(分析) この文は高専5年に在学するフィリッピンからの留学生の文である。本国では低学年時より英語に慣れているのでdiscourseがきちっとできている。exhausting→many activitiesの照応によりintroductionを決め、first of allという語句により例を上げていく。at nightとduring daytimeの対比もきちっとした構成である。a treasurer in the churchという聞き慣れない単語には(church of Christ)と付加説明をしている。最後部でmost exhaustingとコントラストを示している。語いから見たdiscourseがしっかりしている例である。

5 A Friend of Mine

このタイトルで、「途中に会話文を最低1つ入れよ」という条件で書かせたものの中から、次の3例をあげ、語いのdiscourseを分析してみる。

(5 - 1) Last Friday, I met my friend. He came back from school on his way home. I met him in the train. I said to him, "Hello, how about you?" He answered "Fine, thank you. And you?" I answered, "I'm fine, thank you".

(5 - 2) My best friend is a good at playing action game. I can't understand what she like marason. She say "I don't like school". She has more friends in other class. Of course, she's friends is my friends, she's are very interesting.

1 Mt. Fuji

- (1) Mt. Fuji is Japanese mountain.
- (2) This is the highest mountain in Japan.
- (3) This is 3776 meters high.
- (4) The mountain is very wonderful.
- (5) The top always is covered with snow.
- (6) The mountain is known for tourist resort.
- (7) We can see this mountain from far.
- (8) So we call Fujimi many places of Japan.
- (9) For example, Fujimi-zaka, Fujimi-dori.
- (10) This mountain is Japanese symbol.

(分析) 日本人英語の特徴に「同じ語の多用」という問題がある。日本人の頭の中では、この作文に見られるように「日本の山」「最も高い山」や「その山」と何度もでてくる事が不思議ではない。そのまゝ繰り返すと英文にした場合は、くどい感じがする。語いのdiscourse決定に関して学習者に教えていくべき大切な項目であると言える。

語いの選択に関して、使用した語とその文を含む配置もdiscourseに重要な要素になる。この(3)の文は(4)に影響を与えというより(7)~(9)の文に関連が強い。しかし、(2)と(3)はhighest, highの2語により密接な関係があるので切り離すことはできない。そこで、(4)~(6)の置かれる位置を考慮する必要がある。(4)のwonderfulの理由の1つに(5)のsnowがあると考えられるので(4)と(5)は離すことはできない。(1)(4)(5)(6)(2)(3)の順序だと語い上からの照応のバランスがよいと思われる。

2 Sumo

I'll explain about Sumo.

The Sumo is the national sport of Japan. The Sumo player is called "rikishi". They are very fat and heavy. And their hands also big. The place played Sumo is called "dohyo". It is the circle drawn by rope. I'll explain about the rule of Sumo. If you push your qurrel out of the dohyo, or qurrel touch the ground's, you are a winner. It is said that there are 48 winning tricks. Those are simple explain about Sumo. Did you understand?

(分析) この英文はwritingであるが、他の人に語りかける形式をとっている。I'll explain aboutが2回使われ、youという相手を想定した語いを用いている。前半でSumo全般を述べ、2つ目のI'll explain~ruleの説明に移る。その分担がはっきり分れているのでdiscourseの面から良い構成といえる。最後の文は日本語の「分りましたか」につられてDidを使用したものである。Speakingをもとにしたwritingの場合discourseもきちっとしてくる。初級の学習者には、“Speaking before writing”という筆者の考えに合う。

3 Sumo

- (1) Sumo, the wrestling of Japan is one of the most popular sports in Japan.
- (2) Because, in Sumo, there are seventy different techniques to defeat one's opponent.
- (3) So Sumotori polish one's skill everyday.

抜けたか、the people livingのlivingをliveとしたのかどちらかであるが、本人はwhoの脱落だと思うと述べている。日本語で「寺に住んでいる人々」と言いたかったので、まず「その人々」という意味でthe peopleとする。これは後方照応のtheである。次にこの学生はthe people live in temple sound a bell 107 timesという文とthe people lived in temple sound a bell 107 timesのほとんど同じ (live-livedの違いだけ) を繰り返しているが、この学生にとっては、これは大きな違いなのである。後のlivedを含んだ文は次のevery dayを強調するためのものであり、次のsounding a bell 107 timesはonly Omisokaのonlyを強調するために存在している (存在させていると言った方が妥当である。) さらに、long agoがdiscourse決定に力を持っている。次のSoはdiscourse的にはButの方がよさそうだが、この学生にとってはこれは前のThe people live in temple sound a bell 107 times, that named "Jyoya no kane" の部分に対して、So (「そこで、今は大晦日にだけ107つくだ」) と言いたかったのである。このSoはLong agoの文を挿入的に入れた作者の気持が分ると前方照応になっているといえるのである。

5 Ganjitsu

Ganjitsu is Japanese New Year's Day. It is usually called Syogatsu. We can get and write so many New Year's Cards. We can eat the special dish called Osechi. I go to jinjya near my house every year. And I can drink a little

sake. We meet the bell of Jyoya before the day. On Ganjitsu, very famous temples are filled with people. We can enjoy the atmosphere of Ganjitsu for about a week. While the days, The programe on TV is only special menu.

(分析) これは英語力の高い女子学生の文である。Ganjitsu-It-Shogatsuの照応はしっかりしている。special dish-Osechiもdiscourse上の構成がよい。正月中の行事を述べて、I can drink a little sakeの前にだけAndという接続詞を入れている。これは「(酒を飲むのはあまり良い事ではないのだが) 少しお酒が飲める」という気持で () 内の部分を心理的にAndで表わしている。こういうのは「一息の接続詞」で、日本人の英文にはよく出現する。meet the bell of Jyoyaという表現を工夫しているが、before the day (the day beforeの間違い) との時制的照応を忘れている事に頓着していない。enjoy the atomosphereとかprogramにspecial menuという語を結合させていくなどのcreativityを示している。

以上の5つ学生の作文の分析より、次の特徴が伺えた。

- ① 自分だけの照応をもつ
- ② 考えた事と表現との間に「とばし」がある

Ⅲ 語いにみるdiscourse

この章では学生の5つの英作文を語いの面から、そのdiscourseの構成をみる事にする。

music, danceのunificationを指す事を理解していなかった。これは自分のdiscourseでなく、「借りもののdiscourse」の使用の結果である。学習途上の学生には、こういうpatternを多くもっている者が少ない。

3 Sumo

Sumo is a Japan's national sport. It is kind of wrestling. Sumo's player, called rikishi, and they are very big. They usually taller than 1.7 meters. And they are very heavy. The tallest rikishi have 2 meters high. If they play sumo, they wear only mawashi. If they will be pushed out from dohyo or if they will be fell down it lost. Sumo is a very exciting sport.

(分析) この文章の作者は writing ability をかなり持っている。それが前半に出ている。Sumo—sport—wrestlingのdiscourseの前方照応をきちっととらえている。しかし、Sumo's player, called rikishiと同格を使ったが、andという接続詞を入れているので、前の部分が中途半端なものになっている。さらに、次のTheyはSumo's playerを受けているつもりだが、気持としては、「力士は大勢いる」という背景知識があるので、heでなくtheyとしたのである。その次には力士について自分の知っている事項(1.7m以上はあるだろうとか2mもある人もいるとか)を述べていくので、当然前方照応(前で間違っただけに照応している)を使ったものである。さらに次の接続詞の使用となると全くの「日本語的発想」になっ

て、discourseが無視される。If (条件)を用いて、when (場面)を用いる事を思い出せない。更に、If they will be fell down, it lost.に至ってはtheyとifとの関係は本人にもはっきりしないという。ifは「その時は、その勝負は負けになる」と言いたくて、「その勝負」が強く頭の中に入りitで受けてしまう。they lostで前方照応させる力よりも自分の頭の中で作り上げたimageを代名詞化するという事が、かなり英語の能力の高い学生に比較的多く現われるのも興味深い。筆者は、これを「想像上のdiscourse」と呼んでいる。

4 Omisoka

Omisoka is last day of the year. Japanese eat "toshikoshi-soba" in Omisoka. The people live in temple sound a bell 107 times. That named "Jyoya no kane" Long ago, people lived in temple sound a bell 107 times every day. So, souding a bell 107 times is only Omisoka. People go to a temple to hear sound of bell. Or, other people hear at their home. Omisoka has a peculiar atomosphere.

(分析) この文は冠詞とdiscourseの関係が学習者の英語でどのように作用していくかを見るのに興味あるものといえる。Omisokaを個有名詞としてとらえているので(the) last dayのtheを省略している。(これは「最上級にはtheがつく」事を知っていたが、「補語」であるし、個有名詞として述べているのでtheをつけなくてもよいと考えと本人は後で述べていた。) the peopleのtheはthe people (who) liveのwhoが

ていく訓練を重ねる事により解決できると筆者は考える。

以上の事から次の2つの仮説を設定した。

(仮説Ⅰ) 学生に共通するdiscourse上の誤用的特徴が存在する。

(仮説Ⅱ) 学生に共通する語い使用上の特徴が存在する。

Ⅱ 学生の作文のdiscourse analysis

学生のfree writingを5つ取り上げdiscourseを分析し、その中から特徴をさぐり、共通したものを取り出していく。

1 Mt. Fuji

- (1) Mt. Fuji is the highest in Japan.
- (2) This used to be an active volcano.
- (3) But now this is a dormant volcano.
- (4) It is a Japanese symbol.
- (5) It is beautiful.
- (6) A foreigner comes Japan for seeing Mt. Fuji.
- (7) The top of Mt. Fuji is always covered with Snow.
- (8) It ran see fine day.
- (9) It is over two kens.
- (10) It is precious cultutal heritage.

(分析) 代名詞の使用は前方照応のMt. Fuji→Itが(4)(5)に使用されているが、(8)のItはMt. Fujiなのか、the top of Mt. Fujiなのか曖昧である。なぜなら(9)(10)もItで始まっているので、全部が同じものならMt. Fujiを指すのが普通であるが、英語の約束としては

(8)のItは(7)にあるthe top of Mt. Fujiを指すのが一般的であるからである(次回の授業における面接調査により、(8)のItはthe top of~を指すつもりで書いた事が分った。「富士山の頂上の雪」をitで表わしたかったという。この場合、この学生のdiscourseとしては、the top of Mt. Fuji + snow = Itという図式があった事になる。)筆者はこのようなwriter独自のdiscourseを“writer's inner discourse”と名付けている。中間言語話者及び書き手としての学習者にはこういうある意味で自分勝手なdiscourse(読み手を意識しないという意味で勝手と呼んだ)を沢山持っているものである。

2 Kabuki

Kabuki is a traditional theatrical art which represents the popular culture of old Japan. Drama, music, and dance are unified to create a remarkable artistic synthesis. From its very beginning Noh was the theater of the samurai kabuki, the theater of people (以下略)

(分析) この文は前以ていろいろ調べて書かれている。この学生のabilityを越えている語句や表現(artistic synthesisなど)が見られる。もちろん、この事は筆者がこの学生を普段から教えており、その表現法などの特徴をとらえているから分る事である。もし、一般的な試験等でこういう文章が書かれても試験官はでき上った作品としての英文で判断するので、「良い文章」として高く評価されるであろう。この学生の場合には面接調査によりsynthesisがdrama,

ま文を書かせないで、パラグラフ単位で行い、そのためにparagraph analysisの練習の必要性を説いている。M. McCarthy (1991) は “Discourses have beginnings, middles and ends.” と言い、written discourse は “the writer has usually had time to think about what to say and how to say it, and the sentences are usually well-formed in a way that the sentences of natural, spontaneous talk are not” という点でspoken discourseと異っているが、全体的には同じと考えてよいと指摘している。そしてwritten discourseの場合はcohesionが大切と述べている。

筆者は4技能に関して、writing before speakingを強く意図した指導をしている。自由英作文を継続的に課してきた結果をもとに、Speakingに2つのactがあるという事に気がついた。つまりspontaneous act (即時発話) と opinion act (意見発表) である。Spontaneous actはListeningと強く結びつき、opinion actはWritingと相関関係をもっている。自由英作文はopinion actに入るの、writingにより自己の言いたい事を構成した後でSpeakingに発展させる。これがwriting before speakingの意味である。ただし初級学習はspontaneous actを中心とするので、この場合はspeaking before writing (この段階では語りかけるように書くように指導するのがよいと考えている) となる。つまり次の関係が成り立つ。

spontaneous act——Listening, speaking before writing

opinion act——Writing before speaking

ここで、「日本らしいものを一つ選び外国人に英語で説明せよ」という問題に、“o-

sembei” を選んで書いた次の文を例に学生のdiscourseの認識の度合を分析してみる。

(1) O-sembei is made from rice. (2) O-sembei is many kinds of patern. (3) We like it very much. (4) We can buy it anywhere. (5) But now we don't have a O-sembei craftsman. (6) And we have foreign O-sembei. (7) It is using bad rice. (8) Because foreign farmer dust with agricultural chemicals. (9) Soka O-sembei is very popular and delicious. (10) We have to protect Japanese culture.

この英文を作る前にこの学生は頭の中で次のような日本語を考えたと思像できる。

[おせんべいは米から作られ、いろいろな種類がある。日本人は大抵おせんべいが好きである。せんべいはどこでも買うことができるが、最近はおせんべいを作る専門家がいなくなった。そこで輸入もののせんべいが出てきた。輸入せんべいは良質の米を使っていない。外国米は農薬を使っているからだ。日本では草加せんべいがある名で味もよい。この草加せんべいのような日本独得のものは守っていかなければならない]

この日本語は思考上で多少の問題があるにしろ言いたい事を伝えるというcommunicative competenceを有しているといえる。それが英語で表現した時に問題となる事柄を次のように列挙できる。

- 1 論理上の問題 (文のつなぎ方、語句の配置の仕方⇒接続詞の使い方の不適性)
- 2 語いの選択上の問題 (文意を表現できる語いの不足、意味の取り違い⇒語い不足)

これ等の欠陥はdiscourseを認識させ、それを意識して文を作っていく事を指導されていなかった結果であり、discourse単位で物を考え

英作文における談話分析の応用

中 村 俊 昭

Teaching of Writing through Discourse Analysis

Toshiaki Nakamura

I はじめに

この研究は、外国語としての英語教育において学習者がwritingの際discourse（談話）を意識しているかを調査し、その成果を指導に活かす事を旨とするものである。筆者は高校生、高専生、短大生に自由英作文を課してみ、個々の学生が自分の伝達内容を系統立てて述べるには、wordsとsentencesのレベルを越えてdiscourseの単位で文章を組み立てさせる必要を痛感している。自分の伝達内容に整合性を持つ文章を書く事を期待するため、学生の英文をdiscourse analysisの手法をもとに調査し、その特徴を把握する事から始める。

Discourse analysis（談話分析）は言語とその言語が使用される文脈の関係を研究する学問分野で、1960年代より発達してきた。言語学だけでなく、記号学、心理学、人間学や社会学も含めている点が従来の狭い範囲で扱っている学問傾向と異なり、学際的分野と言えるだろう。

Discourseに関してWiddowson（1990）は次のように言っている。“a mode of social practice, in particular how institutions establish

ideologies for the control of practice”

Gee（1990）は“Discourses are ways of being in the words, acts, values, beliefs, attitudes, social attitudes, as well as gestures, glances, body positions, and clothes”と述べている。A. D. Cohen & A. E. Olstein（1993）は15人の上級学習者を被験者として使い、謝り、不満表現、依頼等に分類しSpeech actsの研究をした。A. Tyler（1992）はnon-native（Chinese）の英語がアメリカ英語話者に理解（誤解）されるかを談話分析の面から研究し次のように述べている。

“a potential source of cross-linguistic / cross-cultural miscommunication is the failure of the speaker to use information structuring ones in ways that watch the listener's expectations.”

またH. Johnson（1992）は“Defossilization”という項目で“fluent-but-fossilized”という呼び方でcommunicative abilityは高いがaccuracyが弱い中級学習者について述べている。日本人学習者の場合はこの逆の現象になると考えてよい。

Discourseを考慮したfree writingは従来、paragraph writingとかprocess writingとして扱われた分野が最も近い。後（1979）は思いつくま